神戸〈ゆうゆうの里〉入居者インタビュー

「団塊世代、ひとつの選択」

土弘佳男（65歳）・眞理（66歳）

「同世代より早く始まったシニアライフ」

フシュル湖畔古城ホテルにて

現役時代、転勤族だった私は、53歳の時、早期退職を決めた。子供も独立し、幸い“自由の身”となる環境になり、故郷神戸に戻ることにした。こうして人より10年早くシニアライフを迎えることになった。学生時代から、カンツォーネに夢中だった私は、長年の夢であったイタリアを中心にヨーロッパ旅行をはじめ、色々なところに妻と二人で旅行を満喫することができた。

「両親、そして姉もゆうゆうの里に入居」

私の父は明治生まれであったが、仕事柄、考えは非常に進んでいた。当時世間で知られ始めた有料老人ホーム・神戸〈ゆうゆうの里〉に入居する会社の先輩の話を聞き、自宅の管理が負担となっていたので、入居を決めた。母がクモ膜下出血で倒れ、2年半ゆうゆうの里の診療所で入院、その間、いつも清潔な布団に寝かせてもらい、顔もとてもきれいだった。母の半年後に安心して、父も他界した。行き届いた看護・介護を見て、私達もいつかゆうゆうの里に入居できたらいいなと漠然と考えていた。姉も同じ気持ちだったようで、やがて姉は京都ゆうゆうの里に入居した。その時姉は、いつか入居したいと思っているなら、早いうちに待機登録していたほうが希望のお部屋に入れるのではとアドバイスしてくれた。

「まだ先、なんて悠長すぎる」

私達夫婦はというと、団塊世代として競争社会にいたから、一斉に後期高齢者になる10年後には、老人ホームの入居も競争になるのではという心配が、頭から離れなかった。決断のきっかけは、妻の体調不良で、大学病院の入退院を経験し、私も老後を考えると不安に襲われた。まだ先、なんて悠長すぎるという思いで、待機登録を申し込んだ。そして約1年後希望の部屋に無事入居することができた。引っ越しは想像以上に大変だった。荷物の整理・処分・自宅マンションの売却。少しでも体力がある早いほうが良いと実感した。

「両親が見た景色に今は感慨無量」

レコードがいっぱいの居室にて♪

一歩ドアを閉めると、今までと全く変わらない生活ができている。早速夫婦で里のアスレチックジムトレーニングに参加、引っ越し疲れも少しずつ癒えて、妻も元気になり、より充実した時間が戻った。趣味の時間もたっぷり持てるのが嬉しい。学生時代から集めたレコード・CDをまた聞き直したい。旅行も、これからは近いところをゆっくり楽しむ旅をしたい。かつて両親が住んでみていた景色を、今自分たちが見ていると思うと、「感慨無量」の気持ちで過ごしている。